

庭先栽培をみなおそう！

なぜ野菜が自給

されなくなったか

三重県農業技術センター
野菜研究室長

稲 垣 悟

もともと経営規模を拡大するための省力技術として開発された農業機械化技術も、水稻単作の兼業農家を支える手段におきかえられてきている。田植機、刈取調整機、乾燥機の個人資本装備の進んだことはおびただしい。機械化に投資した資金は決して少ないものではない。

農業を近代化して自立化するための制度資金も極端に考えるならば、兼業化の促進の資金にすりかえられたと見ることすらできる。

資金の捻出のために、現金収支の近道に走る。また装備するが、また新しい機械を買う、といった「イタチゴッコ」の繰返しで、農業経営は楽ではない。

加えて、日々の副食としての野菜を購入する消費者的存在になった場合、野菜の購入費も馬鹿にならない。

広島県の某普及所の調査では、勤労に耐える保健的立場から、5人家族の献立を立て、この献立表に基いて野菜を購入したとして、算出してみると、1日に950円、1ヶ月28,500円、1ヶ年342,000円の支出額が出てきたという。

これを上廻る収入源を求めない限り、他の都市勤労者と同じ消費経済の渦中におかれている農家経済は、さらに苦しいものになって行くに違いない。離農するか、農地管理農業に転換せざるを得ない。そこでは、食糧を自給し得たという、農家経済の強みは存在しなくなってきている。

(4) 野菜産地の移動

かつて野菜の産地として、自他ともに誇ってきた地域から全く野菜の姿が消え、新しい産地を育

てることに腐心しなければならない事例があまりにも多い。

住宅団地の導入、工業団地の導入といったような社会的要求に迫られて、産地がつぶれて行く場合もあろうが、それとて、その産地が隆々と繁栄していたならば、農家もそうたやすく農地を手離すこともなからう。

耕地を簡単に手離す何等かの誘引があればこそである。要因は地域により、産地により異なるであろうが、1つは『野菜がうまく出来なくなった』ことが大きい。

産地の老朽化―連作障害によって、野菜が出来なくなってしまった。出来の悪い野菜にしがみついているよりも、他の収入の道を求めようとする心の動きが、何時とはなしに地域を支配した時、もはや産地ではなくなってしまっている。

野菜がうまく出来なくなったのは何故か。連作障害だと一口に片づけられそうだが、根は深い。改めて連作障害とは何なのか、原点に立って考え直す時であろう。

たしかに、その時々に対策が立てられ、土壌病害防除対策、微量要素欠乏対策、施設では塩類集積対策と具体的な対策もなされてきた。しかもこれらは、その時点における現象に対する対策にとどまった感が強い。

ようやく「土づくり」と銘打って、抜本的な分析と対策が打出されようとしている。

伊勢沢庵として一世を我世の春と謳歌したダイコンの産地も、大移動を行って、旧産地ではもうみる影もない。こゝでとられてきた施肥の実態から、何等かの示唆が得られるのではあるまいか。

すなわち、大根の産地が形成された明治初期から、大正の末期までは、堆肥にベースをおいて、人糞尿、鯀粕が主力である。大正中期以降、大豆粕が顔を出してくる。昭和の初年になって硫酸が極く少量使われはじめるが、まだまだ人糞尿に依存するところが大きい。

昭和20年代では鶏糞が主役を演じ、昭和30年以降、化成肥料の出番となる。

いわゆる有機質肥料の時代から硫酸、過石の配合肥料の時代、さらに化成肥料～高度化成へと、施肥の体系は組換えられてきている。土壌病害、微量要素欠乏が問題になってきたのが、あたかも

化成肥料へ移行した時期とほぼ時をおなじくする。

こゝに土にかゝわる大きな変化を認めることが出来るのではないか。さらに分析を重ね、いずれ何等かの結論を報告する機会を得たいと思うが、こゝで言いたいのは、『有機源を確保して、土へ返してほしい』の一言である。

農家で堆肥舎が姿を消し、農業生産の残渣さえ畑から持出され、台所の廃棄物が都市同様清掃車のお世話になっている現状を打開する手はないものだろうか。

菜園への誘い

豊富な Vitamin と新鮮さを、確保してほしいものである。あり余る野菜が農村から溢れ出て、近在の住宅団地へ、小都市へ、さらに消費地へと流れて行くのが、本来の流通ではないだろうか。

立派な包装も必要なかろうし、10段階を越すような幾種類もの選別も必要としないだろう。

専業農家はもとより、兼業農家こそ庭先の3 a, 5 a を常時、黄、赤、緑の野菜の供給地として、菜園を確保してくれば、潜在需要は充分満たし得よう。数人の仲間が話合えば、特定の野菜を小市場へ送り込むことも可能である。また、数多くの野菜を分担しあえば、特定の日時での青空市場も開放できる。

季節の野菜を豊富に味わう楽しみ、珍しい野菜を自分で作りこなす楽しみは、農業者の生甲斐でもある。

3 a ~ 5 a の菜園から出発して、小さいながらも産地として発展した例は少なくない。

本県でも、一志郡下の60 ha に及ぶブロッコリーは、もともと菜園から興ったもので、老人、婦人の摘採労力に支えられて定着した産地であり、真杉の山間におけるインゲン、エンドウもまた、小規模な作付の集積による産地である。農家の主婦の労働に支えられた産地でもある。

各県、各地域の多くにみられる“朝市”、“青空市場”もまた、菜園の延長が、生産者と消費者とを直結する流通機構を生みだしたものに他ならない。

家庭菜園を見直して、1農家1菜園を実現することによって、新鮮な野菜が豊富に出廻るだろうし、「農業が……」、「化学肥料が……。」と無駄

な神経を使うこともなかりう。

道傍の草は刈られ、土手の草は畑へ敷きつめられ、畑の残渣、台所の残渣も土へ還元されて、住みよい緑の農村が、再び還ってくるのが期待される。

菜園をもう一度見直して、仲間を拡げて行きたいものである。

◎ 畑を選ぶ……家に近いこと、日当りのよいこと、水はけのよいこと、灌水に便利なこと……要するに日常の管理に便利であることが必須条件である。遠いといふ手が入らない。手軽に手が加えられるところを選ぶ。

◎ 土づくり……土をよくすること、堆肥や刈草、石灰草木灰などを多用して、土の物理性をよくする。有機物を中心に施してよく深耕して土をつくる。その他、米糠、ワラくずを利用、くさり難いものは灰にする等、意外に農家の副産物は多い。土へ還元してやって健康な土をつくっておく。

◎ 輪作を考える……1年の輪作計画を立てること。収穫期、作型を考えて作付を組合せる。

在圃期間の組合せ、連作可能なものと不可能なもの組合せ、豆科野菜のとり入れ、背の高いものと低いものの配列等、作付計画を立てるのが1つの楽しみ。

◎ 作り易いものから……野菜の種類は多い。幾つかの野菜が必要な訳だが、目新しい経験のない野菜は少量ずつ試作して、その特性を充分つかまえてから導入する。まず手なれた作り易い野菜から手がけ、だんだん種類を多くする。上手に出来るものを多くすれば、販売に廻すことも出来る。

むすび

農村の中での社会秩序は、従来のそれとは大きな違いをもっている。純農村といわれた地域でも共通の問題を話しあえる仲間はだんだん少なくなってきている。

菜園でとれた野菜を、交換しあえるような仲間の輪をひろげ、お互いのコミュニケーションをより深くして、新しい秩序を作り出して行かねばならないだろう。あるいは、日常のくらしの中で、主婦同志が共通の場をもつことから、はじめねばならないのかもしれない。(終り)